様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　24　年　5　月　30　日現在

機関番号：１３３０１
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2009～2011
課題番号：21520396
研究課題名（和文）　言語と音楽の接点で何が起きているのか —新たな言語類型を求めて—

研究課題名（英文）　What is Going on at the Intersection of Language and Music?
—Toward a Discovery of New Linguistic Typology—

研究代表者
斉木　麻利子（SAIKI MARIKO）
金沢大学・留学生センター・准教授
研究者番号：00195968

研究成果の概要（和文）：本研究では，声調言語圏に観察される伝統音楽（特に「となえうた」と「わらべうた」）の形式を調査した。そしてその結果を，他の韻律上の特徴を持つ言語（強勢システム並びにピッチシステムに立つ言語）のとなえうた，わらべうたの場合と比較対照することにより，伝統音楽の形式決定への言語情報の関与という観点から，新たな言語類型を求めた。具体的には，伝統音楽におけるアウフタクト（弱起のリズム＝Auftakt [Ger.], Upbeat [Eng.]）の生起要因を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：In this research, we investigated melodic as well as rhythmic forms of linguistic chants that are observed in the cultures where tone languages are spoken. We further compared and contrasted the results with the cases for typologically different languages, namely, languages based on the stress system and the pitch system. The basic factors governing the occurrences of *Auftakt* ([Ger.] = Upbeat [Eng.]) in traditional music were revealed in our research, which in turn would contribute to the new typological study of languages.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	700,000	210,000	910,000
2010 年度	300,000	90,000	390,000
2011 年度	300,000	90,000	390,000
年度			
年度			
総　計	1,300,000	390,000	1,690,000

研究分野：言語と音楽のインターフェイス理論
科研費の分科・細目：言語学・言語学
キーワード：声調言語，伝統音楽，となえうた，わたべうた，北京語，ベトナム語，アウフタクト

１．研究開始当初の背景

現代言語学の枠組みの中での言語と音楽の比較対照研究は，特に，F. Lerdahl & R. Jackendoff (1983, A Generative Theory of Tonal Music, MIT Press）以来，言語研究者だけではなく，文系，理系を問わず，さまざ

まな分野の研究者の注目を集めている。これは，言語と音楽の両者がヒトの普遍的産物である限り，その研究成果は，ヒトの脳のメカニズムの解明に直結するからである。

本研究も，これを究極の目標とする研究の一つである。特に，本研究は，分析対象を伝統音楽の領域中最も言語に近い部分に位置する「となえうた（chant）」に定め，これを調査することにより，未だ明らかになっていない，言語の普遍的特徴を探ろうとするものである。

また，本研究は，アメリカ合衆国ニュージャージー州，ラトガース大学東洋言語学科准教授, Young-mee Yu Cho氏（以下Cho）との，研究代表者の共同研究の一部である。

Choと研究代表者は，本研究開始以前の7年間，共同研究として，となえうたに分類される「呼びかけチャント（vocative chant，以下VC）」[注1]に焦点を当て，分析を行った。

具体的には，有アクセント言語（accent language）と無アクセント言語（accentless language）の両者を対象に，諸言語圏のVCにおける，語彙（歌詞）とメロディー，及び，語彙とリズムの対応パターンを調査した。また，われわれが調査対象とした有アクセント言語には，英語，ドイツ語などの強勢アクセント言語（stress accent language），東京方言，韓国語の慶尚南道方言などのピッチアクセント言語（pitch accent language）が，無アクセント言語には，福井方言，韓国語のソウル方言などが含まれる。

われわれの過去の研究過程で得られた事実や一般化は数多いが，そのうち，本研究課題の基盤になるものとして特に重要なのは,「弁別的なアクセントの強弱または高低，及びコントラストが，VCメロディーの形式決定の最大の要因である」という一般化である。

例えば，強勢システムを基盤とするか，ピッチシステムを基盤とするかにかかわらず，有アクセント言語のVCの場合，歌詞を構成する名前の部分が担う音調とVCのメロディーパターンの間には相関関係があり，両者の数も一致する。これに対して無アクセント言語の場合，VCメロディーは言語情報とは無関係にパターン決定され，その数は，おしなべて一つなのである。

ここで一つの疑問がわいてくる：「われわれは，過去の共同研究で，強勢システムまたはピッチシステムの上に成り立つ諸言語を調査することにより，上記の一般化を求めた。それでは，韻律体系上残るもう一種類の言語，すなわち，声調言語（tone language）の場合はどうなのか」という疑問である。

本研究は，この疑問への答えを求めることを目標に，スタートしたものである。研究対象は声調言語とし，研究期間は，2009年度から2011年度までの3年度間とした。

[注 1] VC とは、主に子どもが友達を呼ぶ時に用いる「となえうた」のことで，起源は不明である。またこれは，名前（＋接辞）と任意の表現から成り，一定のメロディーを伴う。「♪ま～り～ちゃ～～ん，あ～そ～ぼ～～～！」というのが日本語の場合の一例で, メロディーは, 東京方言では,「A-G-A、E-G-A」となる。

２．研究の目的

本研究では,「伝統音楽の形式決定への言語情報の関与」という観点からの，新しい言語類型を提案することを目指した。

そのため, 本研究では, 資料文献に基づき，声調言語圏の伝統音楽（特に,「となえうた（chant）」,「わらべうた（children's play songs）」）のメロディー及びリズム形式を調査した。

そしてその結果を，Choとの過去の共同研究で得られた，他の韻律上の特徴を持つ言語圏の伝統音楽の研究結果と比較対照することにより，新たな発見を求めた。

３．研究の方法

民俗音楽研究者である小泉文夫は，伝統音楽は，生みの親である人間が話す言語に密着しており,「伝統音楽と言語は，相互に影響し合い，それぞれの形式が決定される」と指摘している（『音楽の根源にあるもの』小泉文夫著，平凡社，1994）。この指摘は，Choと研究代表者が共同研究の方法論として「言語と音楽のインターフェイス」という立場に立つ根拠であり，本研究でも，これを踏まえて作業を行った。

2009年度には，北京語の韻律的特徴ならびに北京語圏の伝統音楽の特徴について調査した。

そこでの注目すべき調査結果は，北京語圏のわらべうた99の楽譜とその歌詞の朗読（チャンティング）をCDに収めた図書[注2]を入手し，分析したところのものであるが，それら99のわらべうたには，アウフタクトの生起が観察されないということである[注3]。

2010年度（2010年9月30日）には，上記の結果を過去のChoとの研究結果に関連付け，伝統音楽中のアウフタクトの生起要因に関して，ベルリン自由大学（ドイツ連邦共和国）で開催された6th International Contrastive Linguistics Conference（ICLC6）にて発表した。

その際, 参加者より数々の指摘を受けたが, それをきっかけとして，2010年度の後半から2011年度にかけては，ベトナム語圏の伝統音楽ついて調査するに至った。

具体的には，ベトナム各地の伝統的なとなえうたとわらべうたを採譜・編集した幼児のための歌謡集を3冊入手し，分析した。その結果，特に，そのうちの1冊の場合などには，収められた50曲のうち32曲にものぼる数でアウフタクトが観察されることを確認した[注4]。ベトナム語は北京語と同様に，韻律上，強勢ではなく声調が弁別性を持つ言語なので，この調査結果は興味深い。

さらに，複合語の分析に基づいた最近の研究に，ベトナム語の表層強勢を強く示唆するものがあることも明らかになった[注5]。

[注 2]『わらべうたで学ぶ中国語』王迺珍・川崎将夫 著，連合出版，2008.

[注 3] アウフタクト(Auftakt [Ger.]=Upbeat [Eng.])というのは, 曲やフレーズのスタート部分に表れる弱拍(weak beat)のことで, イギリス民謡＜Greensleeves＞（作者不明）のうたい出し，'Alas, my love…’ の A の部分がその一例である。英語やドイツ語などの強勢アクセント言語圏では，となえうたにとどまらず，伝統音楽一般に，アウフタクトが頻繁に観察される。

[注 4] *Nu Na Nu Dống: Tuyển tập càc bài hát đồng dao viết cho thiếu nhi*, Nhà Xuất Bản Àm Nhạc: Hà Nội, 2010.

[注 5] Nguyễn, A-T. T and John C. L. Ingram (2007) “Acoustic and perceptual cues for compound-phrasal contrasts in Vietnamese,’ in *Journal of Acoustics Society of America*, 122 (3), 1746-1757.

４．研究成果

本研究で得られた最も重要な知見は，伝統音楽のリズム形式決定の要因に関しての一般化である。

すなわち,「伝統音楽に‘アウフタクトのリズム’が観察されるか否かは，歌詞を構成する語彙の表層における強勢（stress）の存在と, その分布に依存する」ということである。

となえうた，わらべうたでは，弁別性の有無に関わらず，歌詞の表層に現れる強強勢（strong stress）が音楽の強拍（strong beat）に，また，弱強勢（weak stress）が音楽の弱拍（weak beat）にリンクされ，リズムが形成される傾向にある。

例えば，英語圏のとなえうた，わらべうたにはアウフタクトが頻繁に観察されるが，これは，英語では，発話冒頭の音節が，文強勢または語強勢として，弱強勢を担い得るからだ。すなわち，英語の歌詞の，冒頭語彙の第一音節に弱強勢が現れた場合，これが音楽側の弱拍にリンクされ，アウフタクトのリズムが形成されるのである。

チェコ語は強勢システムを基盤とする言語であるが, 表層では, 弁別性のない強強勢が, おしなべて語彙の第一音節に置かれる。よって, チェコ語のとなえうた, わらべうたでは, 歌詞冒頭に弱強勢は生起せず，代わりに常に強強勢が現れ音楽側の強拍にリンクされるので，この言語のとなえうたには，実際にアウフタクトはほとんど観察されない。

さらに, 日本語と韓国語はピッチシステム, 北京語は声調システムに立つ言語であるが, これら言語圏のとなえうた, わらべうたにも, アウフタクトはまれにしか見られない。これは，これら３言語が，そもそも表層の強勢を持たないからである。

しかしながら，３．で報告したように，本研究では，ベトナム語圏のとなえうたやわらべうたには，アウフタクトが頻繁に観察されることがわかった[注4]　。

この調査結果には注目せざるをえない。なぜならば，ベトナム語は声調言語なので，上述の，アウフタクト生起に関する一般化が真であるとすれば，伝統音楽としてのとなえうた，わらべうたの中に，アウフタクトは生起し難いと予測されるからだ。

よって，この予測に反して，ベトナム語圏の伝統音楽に，アウフタクトが頻繁に観察されるとなると, 考えられることは一つである。すなわち,「ベトナム語には，表層の強勢が存在するのではないか」ということになる。

この仮説は，３．に記したような，ベトナム語の表層強勢を強く示唆する最近の研究によって支持される[注5]。

「はたしてベトナム語の表層に，強勢は存在するのか，しないのか？」今後のChoとの共同研究では，この問題にアプローチしていく。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）

① Cho, Young-mee and Mariko Saiki (2010) "Contrastive Realization of Linguistic Prominence in Music," in *Program & Abstracts of the 6th International Contrastive Linguistics Conference* (ICLC 6), Freie Universität, Berlin (Germany), 162（査読有）.

〔学会発表〕（計１件）

① Cho, Young-mee and Mariko Saiki (2010.9.30) "Contrastive Realization of Linguistic Prominence in Music," the 6th International Contrastive Linguistics Conference (ICLC 6), Freie Universität, Berlin (Germany).

６．研究組織

(1) 研究代表者
斉木　麻利子（SAIKI　MARIKO）
金沢大学・留学生センター・准教授
研究者番号：00195968

(2) 研究協力者（海外共同研究者）
Young-mee Yu Cho
ラトガース大学・東洋言語学科・准教授
（アメリカ合衆国ニュージャージー州）